

桐方柏江

「いっつゝYouTube 見ってるよね」
イヤホン越しに聞えた声。片耳だけ外し、声の方を見る。

「そんなに面白いの？」
続けて声を飛ばしたのは私の友達。私とはかなり趣味が合うが、YouTube のことだけは理解してくれない。

「面白いよ、だって自分にはできないことをやってくれるんだもん」

「そういうもんかあ」
首をひねっている彼女はそのまま部活へと行ってしまった。

笑い声をまた耳にさす。後ろに挨拶を聞きながら、クラスを出て下駄箱で靴を履き替える。非現実的に浸りながら通学路を歩く。この時間は幸せだ。好きな YouTuber の動画を聞きながら、他の面白そうな YouTuber をあさる。

「お、これとか面白そう」
YouTube のお勧めから出てきたのは再生数もあまりないが、好みの YouTuber。

お勧めされたのなら見てみようじゃないか。指と画面が触れる。

一瞬のうちに画面が切り替わる。くるくる回るのは通信制限のせい。自分を見つめながら待つこと数分。五人の人物が現れた。

いずれも陽気な人物で、まだ幾分かのきこちなさはするけれども、これから面白くなる予感がした。しかし、私の目を釘付けにしたのはそのなかでも静かに笑っている一人の男性だった。冒頭部分に返って名前を確認する。その男性は「セイ」というらしい。

周りがどれだけネタに走っても、彼だけは静かに笑っていた。周りにあわせて、くつくつと肩を震わせて笑う

様子が私の心に強く残る。

ゆるく握った左手を口元にあてくつくつと。肩を震わせくつくつと。私の耳には彼の笑い声だけが届いていた。彼のくつくつ笑いが好きなのは他にもいるはず家に着いた私はコメント欄で「セイ」の名前を探す。まだそこまで人気が出ていないからか、コメント数は少ない。

「セイ、セイ、セイ……」
「あれ？」

素天辺から最後までしっかりと確認したのに、彼の名前が見当たらない。見落としたのだろうか、もう一度確認する。他のメンバーの名前はあるものの、やっぱり彼の名前は見つからない。

「もしかして、ファン一号になれるかな……？」

これだけ探してもないのならまだファンはいないのだろう。気分は発掘途中で宝石を見つけた研究者。これから彼の成長が見られるなんて。

「[DM]で友達にURLを送る。」

「ねえ、この動画見てみてよ」

『きつと面白いからさ』

『youtu.be/xxxxxx』

もう一度YouTubeに戻り、コメントをつける。

「私はこのセイって人が好き」
他の動画も回りながら同じようなコメントを付けていく。その時、並行して他の人の彼の名前を探すも見つからない。

動画を数個ほど回った時、コメントに返信が来た。

「セイってただ静かなだけじゃん笑」

「はあ？」

思わず声が出た。

「そ、こ、が、い、い、ん、じゃ、ない、で、す、か」

力を込めてそう返信し、アプリを閉じる。

「同じグループが好きなら一緒に応援すればいいのに」
ネット界限特有の何を言っても許されるような風潮だけには虫唾が走る。ベッドの上で寝転がりタオルケットを被る。暗闇で唱える。

「今この世界に私は一人。暗闇の中に一人だけ」

そうすればこの気持ちはどうにかなる気がして。

「はあ」

吐息が漏れる。このまま寝てしまおう。寝ればいくらか忘れられそうだから。

ブーブブ

手に持ったものから振動が伝わる。つけたスマホの明るさに目が驚く。友達からの「LINE」だった。

『やっぱりわかんないや』

『え、でも、セイって人かっこよくない？』

新しく文を送った後、スマホを投げ出し、伸びをする。

バキポキと体の中から音がする。

ブーブブ

『え、そんな人いる？』

「え？」

何言ってるの？動画の冒頭では挨拶してるし、友達には彼がずっと映っている動画を送った。

『え、いるじゃん。ずっと画面に映ってるよ』

もう一度動画を聞く。確かにセイはそこにいる。

『いやいやいないって。何言ってるの？』

『YouTubeの見過ぎでおかしくなったの？笑』

はあ。

私は見ないようにしていたYouTubeからの通知をタッチした。私のコメントに最初に返信した人はセイのこと

を知っていた。今はセイがいることの証明になればどんな言葉でもいい。

〈セイとか見る目なさすぎでしょ〉

〈意味わからなすぎ〉

〈え、やば〉

良かった。やっぱりセイはいる。誰も彼を好いていなくても、彼の存在を否定していない。

『はあ？いるから！馬鹿にしないでよ』

再度LINEを送り、YouTubeに戻る。丁度良く、彼らのチャンネルが更新された。イヤホンを耳に付け、私は動画が始まる前に、コメントを付けた。

〈セイさん、私はあなたのことを応援してます！頑張ってください！！〉

もう聞きなれた自己紹介が耳を通り過ぎる。と、視線を感じて顔を上げる。この部屋には誰もいない。それに家族の帰りはいつも遅い。どれだけあたりを見ても視線がどこからきているのかわからなかった。周りはとても静かだった。壁に背を付けてタオルケットにくるまる。

視線を落としてスマホを見ると目が合った。セイがこちらをずっと見つめていた。他のメンバーは全く動かなかった。目が離せない。スマホを持った手も指も凍り付いたようだった。

画面の中のセイはくつくつと、肩を震わせ言った。

「やっと見つけたよ、僕の器」